

り致します。

## 人生の師武田ミキ先生

秋 山 幹 男

一九七二年三月上旬、私は面接のため可部線の電車に乗り国鉄可部駅で下車した。文学部棟の玄関の上二階にあった学長室で先生にお会いした。ミキ先生七十歳、私は二十八歳だった。以来二十二年の長きにわたるお付き合いとなった。青年期を終わり、社会人になってまだ四年しか経っていない未熟者の私をここまで育てあげて下さった心の教育に対し、心の底から深い深い感謝を申し上げます。

私はお年をめされた女性のお話を聴くことは割と得意であった。だから二・三時間位じつとだまって耳を傾けることは苦にならなかった。それが幸いした。とにかく沢山のお話を記憶にとどめることができた。また、研究上の必要から私はメモ魔でもあった。引出し・保管庫の中には武田ミキ先生の資料が一杯貯っていた。それが二十分であればどれ位の量になるか察しがつきますか？大変なものでした！不思議に私は先生と気楽にお話ができました。ミキ先生もそうではなかっただろうかと思っております。その理由は夜にあったと申し上げたら皆さんはどのように思われるでしょうか。それは愛でした！と言えば多分誤解をまねきかねませんが、そこは七十一・九十二歳の

人生の師です。精神的な愛だったのです。夜遅くまで仕事をしておられました。先に帰る時、時々挨拶をしておりました。その折り、学長としてのミキ先生ではないもう一人のミキおばあちゃんになって下さったのです。また、一度だけお会い下さった今は亡き私の父のことをよく誉めていただきました。有難いことです。本当に有難い事でした。

先生が九十一歳のお誕生日を迎えられた時、私達教育研究所のスタッフは「武田ミキ人間教育論」を発刊することができました。私は、「第二章 めざす人間像」を担当させていただきました。沢山のメモ・保管していた先生のお手製の資料が大変役にたちました。その後一年間は、本当に時々、先生の新しいお家を訪問させていただきました。ミキ先生の愛し続けられたキャンパスと一緒に眺めました。

告別式の折り、私の前の献花に蝶が一羽飛んでまいりました。平成五年十二月二十九日午後一時二十分頃の出来事でした。その夜は満月でした。東の空にまたたく星が一つありました。ご冥福をお祈りします。ミキ先生（おばあさま）これからは何時も私の心の中に生き続けて下さい。合掌。